

## すいか作農家の収穫労働について

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
著者	福士, 俊一 田中, 浩 石田, 佐世子
巻/号	41号
掲載ページ	p. 9-14
発行年月	1977年5月

# すいか作農家の収穫労働について

福士俊一・田中 浩・石田佐世子\*

## 1 はじめに

鳥取県におけるすいか作農家は年々増加の傾向を示し、生産性の高い主幹作物となってきたが、その作付規模は収穫期に確保できる労働力で決定するといわれている。しかも、露地栽培に加えて前進作型の導入により、収穫作業は7月、8月にわたる最も暑い時期に行なわれること、作業内容も重いすいかの採取、運搬が主作業であるなど、収穫期の作業者の労働負担はかなり過重なものとなっている。すいか収穫、出荷作業のうち、ほ場での採取、搬出作業と選果場でのひょう量、選別作業は各農家ごとに行ない、包装、大型トラック積み込み作業は共同で行なっている。最近、選果場作業は運搬車、ベルトコンベヤ式選果機の導入などの改善がなされているが、ほ場作業は依然として人力に依存する作業が多く、作業者の大半が苦渋性と疲労症状を訴えている現状にある。

本報では、ほ場における慣行収穫法の作業研究と労働強度について述べ、さらに搬出作業の省力化について検討したのでそれを報告し参考に供したい。なお、本研究の一部は昭和50年度鳥取県農家生活改善技術実験研究(1)として実施した。

## 2 対象地区(東伯郡大栄町岩坪)の概況

大栄町は鳥取県のほぼ中央に位置し、東西約7km、南北約11km、日本海に面した海岸砂丘地を北端とし、南西の大山すそ野に細く三角状に展開する面積約36km<sup>2</sup>の地域である。対象の岩坪は山よりの丘陵台地にあり、土質は火山灰層(黒土)である。年間の平均気温は14.6°C、平均降雨日数は168日で降雨量は2,103mm、降雪期間は平均97日の山陰型気象である。交通の便は良好で、海岸部を国道9号線が横断している。国道9号線、29号線、中国縦貫道などの整備は、出荷農産物の鮮度保持、市況の変動に即応する出荷体制をとることを容易にしている。このため農産物は県外出荷が多く、その販路は京阪神を中心に東京、九州方面に伸びている。

対象地区の農家戸数、農家人口の構成、耕地面積および農業粗生産額を表1、2、3に示した(2)。

## 3 すいか作の動向と収穫・出荷作業

大栄町のすいかは昭和35年ごろから団地化の動きが見えはじめ、40年の100haから45年は220haと急速な伸びを示し、49年には鳥取県下の作付面積1,450haの3分の1に当たる420haを730戸の農家が作付し、粗生産額は14億円、50年には452ha、20億円に達した。つぎに、栽培、出荷面の動向をみると、45年頃までにかんぴょうつぎ木栽培法の普及、しゃ断根栽培法の開発が行なわれ、出荷方法もバラ輸送から紙袋出荷を採用、46年にトンネル栽培を始めて早出しをねらい、47年から家畜ふん尿を地力増進に使って土づくりに効果をあげ、48年に大型ハウス栽培を開始、ベルトコンベヤ式選果機を備えた集出荷施設と育苗センターを3カ所に建設するなどの栽培技術と出荷体制を導入し、確立し、県特産すいかの主産地づくりに成功した実績が認められて51年度朝日農業賞県代表に推薦された。

岩坪の昭和49年におけるすいか栽培農家は14戸、作付面積は1,568aで1戸当たり最小80a、最大190a、平均112aである。露地栽培10a当たり収量は900~1,000玉(平均重量7~8kgとして)、年間総労働時間は280時間で、そのうち150時間(54%)が7、8月の収穫期に集中し、その47%(70時間)が収穫作業に費やされている。なお、他作物の49年度栽培実績をみると、稲は14戸が栽培して作付面積は961a(1戸当たり平均69a)、芝9戸で610a(68a)、だいこん14戸で1,018a(73a)、キャベツ10戸で207a(21a)、なし12戸で766a(64a)、家畜飼養農家は14戸となっている。今後の経営方針は経営規模拡大志向農家5戸、現状維持志向農家10戸であり、経営の主幹作物として、すいかとなしプラスαを11戸の農家が志向している。

岩坪の収穫期の作業内容は次のサイクルで行なわれる。各農家の作業員は午前8時に共同選果場に出役する。まず前日の午後各農家ごとにひょう量して重量別に並べてあるすいかを共同で秀、優、良の等級に分け、紙袋包装を行ない、4台の大型トラックに手押三輪車あるいは人力運搬で積み込みを行なう。出荷作業が終れば午後2時頃よりほ場に出かけ、すいかの採取、ほ場外搬出(ネコ

表1 農家戸数、農家人口の構成

(上段実数, 下段%)

区 分	総戸数 (戸)	農 家 戸 数 (戸)				農 家 率 (%)	総 人 口 (人)			農家人口(人)			農家人 口割合 (%)
		計	専 業	第 1 兼 種	第 2 兼 種		計	男	女	計	男	女	
大 栄 町	2,098	1,244	373	386	485	59	8,675	4,133	4,542	5,987	2,866	3,121	69
		100	30	31	39		100	48	52	100	48	52	
岩 坪	17	15	13	2	—	88	88	43	45	84	42	42	95
		100	87	13	—		100	49	51	100	50	50	

表2 耕 地 面 積

区 分	総面積	田	樹 園 地		普通畑	農家1戸当 たり平均 耕地面積	耕地率 (%)
			計	内果樹園			
大栄町	1,630ha	610	103		917	131a	45
	100%	38	6	100	56		
岩 坪	43.3ha	11.5	7.7		24.1	289a	47
	100%	27	17	7.7	56		

表3 農業粗生産額(上段:万円, 下段:%)

区 分	農 業 粗 生 産 額					
	総 額	米	野 菜	果 樹	畜 産	その他
大栄町	470,500	44,200	233,600	29,600	85,700	77,400
	100	10	50	6	18	16
岩 坪	11,060	1,480	5,360	2,910	800	510
	100	13	49	26	7	5

注: 表の大栄町の数字は中国四国農政局生産流通部稲転の「農業動向報告書」(昭和48年度), 岩坪の数字は昭和50年農業センサス。

車運搬), 小型トラック積み込みを行ない, 共同選果場に運搬する。選果場では, 木箱の上に台ばかりをおき, すいかをひょう量して重量別に並べる。作業分担は, トラックのすいかを取る人, ひょう量する人(両方の作業を1人で行なう場合もある), 並べる人2~3人で行なう。ひょう量が終ればすいかを布でふき, ラベルをはって1日の作業が終了する。

各農家の出荷量は選果場への出役人数で決定され, 1人当たりの出荷量は700kg, 約100玉である。各農家ではこのすいかを2~4人の作業員で収穫し, しかも, 2人あるいは3人が1組となって作業を行なっているから, 2人組作業の場合採果だけでも毎日1人当たり1,400kgのすいかを取り扱うことになる。収穫作業は破損を気づかひながら腰, 腕, ひざなどに力を入れた前屈, 中腰姿勢で行なうので, 70%の人が苦渋性を, 60%の人が農作業の合理化を訴えている。

ここで岩坪の農業従事者の疲労度をみると(47年度に倉吉農業改良普及所が理研式人体疲労計で男女延249人測定), 5月(すいか植付)は過労19%, 疲労63%を示し, 6月(施肥, 除草)は78%, 22%, 7月(除草, 消毒, 収穫)はそれぞれ79%, 21%, 8月(収穫)はそれぞれ90%, 10%, 9月(後仕末)はそれぞれ20%,

33%を示している。また, 収穫期の作業員(男女とも15人)の身体疲労部位の調査では, 腰に男87%, 女67%, 肩に20%, 47%, 腕に47%, 37%, ひざに40%, 13%の疲労を訴えており, 収穫期の省力化の必要性が健康の面からも急務となってきた。

#### 4 収穫作業の分析

##### (1) 慣行収穫法の作業内容

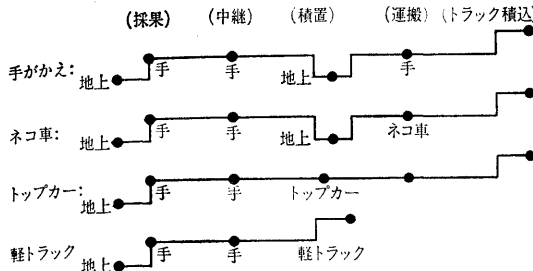
慣行法のほ場は, 株間1.5m, うね幅5mで10a当たり植付本数110~130本, 管理道(うね間)は30~40cmであり, これを利用してネコ車(1輪車)搬出を行なう。

2人組作業は採果者がうねを歩きながらすいかを探し, 前屈姿勢で打診して熟度を確かめ, 手でつるから切り離して持ち上げ, うね間の中継者に投げ渡す。中継者は受け取ったすいかを前屈しながらうね間に置いていく。3人組作業はうねに2人, うね間に1人位置して作業を行なう。採果者は採果したすいかをうねの中継者に渡すか, 直接うね間の中継者(置く人)に投げ渡す。うねの中継者は採果者からのすいかを中継ぎすると共に, 自らも採果してうね間の中継者に渡す。うね間のすいかのほ場外搬出には手がかえ法またはネコ車を使用する。ネコ車搬出法では, 荷台に毛布を敷いたネコ車をうね間のすいかまで引っ張って運び, すいかを10玉程度2段に積み重ね, 押して農道の小型トラックまで運搬する。ネコ車の荷重は70kgを越え, 軟弱なうね間をバランスをとりながらの搬出作業は, すいか収穫作業の中で最もきつい労働となっている。小型トラック積み替え作業は, ネコ車を荷台の後方に置き, 荷台の後枠を降ろして1人または2人リレーでていねいに積み込む。1段目が一杯になると後枠を上げて2段, 3段と山積みする。積み終れば毛布で覆い縄をかけて共同選果場へ運搬する。

##### (2) 改善収穫法の作業内容

慣行法の搬出作業の省力化をはかるため, トップカー, 軽トラックをほ場に入れて採取したすいかを直接積み込んで搬出する方法に改善し, さらに, 搬出道を利用する軽トラック利用ブームスプレーヤーを導入して薬剤散布作業の合理化をもはかった。改善法のうねは株間1.5m,

図1 すいかの移動経路



うね幅9mの2条だき合わせうね作りとし、10a当たり植付本数100本、搬出道は軽トラックの通行可能な1.4m(トップカーは1m)の幅員とした。なお、トップカーは、オートキャリー、俗にトップネコと称する動力三輪車の荷台に縦150cm、横110cmの木箱を塔載した運搬車である。

トップカー収穫作業は2人2組で行ない、トップカーの両側のうねでそれぞれ採果、積み込みを行なう。中継者はトップカーのそばにいて採果されたすいかを受け取って積み込むが、採果者が離れている時には移動して受け取る。慣行法ではうね間の積み置き、ネコ車積み込み作業が屈伸動作を伴うのに対し、トップカー積み込み作業は立位姿勢で行なうため屈伸動作が少なく、腰の負担軽減をはかることができる。作業の途中で中継者は2~3回トップカーを後進させるが、後述の軽トラック法に比べて簡単に操作できる利点がある。約50玉積み込むとそのまま後進させて農道の小型トラック後部に横付けし、2人リレーでトラックに積み替える。トラックとトップカーの荷台の高さに余り差がないので、ネコ車法に比べて上挙動作が少なくなっている。

軽トラック収穫作業は2人2組、あるいは3人組で行なう。2人組作業はトップカーと同様の手順で行なうが、トラックに直接積み込むので運搬と積み替え作業を省略することができる。中継者は積荷の具合によってすいかの並びかえを行なうが、その際他の中継者は採果者2人のすいかを受け取っている。3人組作業では、中継者の1人が車のそばあるいは荷台上に位置し他の中継者の中継したすいかを受け取って積み込む場合と、2人の中継者が交互に採果者からすいかを受け取って積み込む場合とある。車の移動は中継者が行なっている。

ここで、慣行、改善収穫法におけるすいかの移動経路を要約すると図1のごとくである。

手がかえ、ネコ車法は採取したすいかを一度地上に置き、さらに持ち上げて運搬し積み込んでいるため上下と運搬の移動を伴うのに対し、トップカー法では積み置き作業に伴う上下移動が省略される。軽トラック法ではさらに運搬と積み替え作業に伴う移動が省略され、1人当

たり700kgのすいかの運搬と上下操作が2回で1,400kgの取り扱いが省略されている。

### (3) 収穫作業の時間研究

前述の慣行法および改善法(軽トラック利用)による栽培試験を50年度に実施し、8月上旬に収穫作業の実測を行なった。標本農家は家族数6人、基幹的農業従事者は経営者夫婦(40代)と後継者夫婦(20代)の4人である。50年度の栽培実績は、すいか167a(トンネル作30a、普通作137aで実験ほ場は改善法栽培104a、慣行法栽培27a)、稲85a、芝34a、だいこん130a、キャベツ20a、なし83a、繁殖豚1頭で、なし・すいか・キャベツ・だいこんを主幹作目とする現状維持志向農家である。

改善法のトップカー収穫作業については51年8月上旬に測定した。標本農家は家族数6人、基幹的農業従事者は経営者夫婦(30代)とその父親(60代)の3人(収穫期雇用者1人)で、すいか90a(普通作、改善法栽培)、稲160a、芝100a、だいこん20a、乳牛10頭、和牛1頭で、稲・酪農・すいか・芝を主幹作目とする現状維持志向農家である。

収穫作業の各要素作業動作区分(測定点)は次のごとくである。

1) 採取作業は、採果、中継、積み込み(置く)の各作業をさらに2要素に区分した。

a. 空手要素作業: すいかを手離してから次のすいかを持つまでの動作で、すいか荷重負担のかかっていない動作。

b. 荷重要素作業: すいかを保持し次に手離すまでの動作で、すいか荷重負担のかかっている動作。

2) ネコ車とトップカー作業は次の4要素に区分した。

a. 空の運搬車を農道のトラックからは場へ運搬する。

b. 運搬車にすいかを積み込む。トップカー作業の場合この要素作業は採果作業と積み込み作業に区分されるが、ここでは一括して積み込み作業とした。

c. 積載運搬車を農道のトラックへ運搬する。

d. 運搬車のすいかをトラックに積み替える。

なお、作業者の作業動線距離は、採果作業を行なったうねの長さあるいは運搬車の移動距離で示した。各作業の測定値および分析の結果を表4、5に示した。

採果空手要素作業の速度は収穫期の前後半、標識数、既行採取回数などによって異なり、改善法ではさらに積み込み作業によって規制される。本調査時期は収穫中期にあたり、採果空手要素作業の所要時間は両法とも0.10分前後を示している。中継および積み込み(置く)作業

表4 すいか収穫作業の時間分析(1)

(時間単位：1/100分)

作業区分		改善法						慣行法				
		軽車3人組			軽車2人2組			採取3人組				
		採果	中継	積込	採果	積込	採果	積込	採果	中継		積置
									採果	中継		
全要素	合計	1,331	1,333	1,341	972	977	973	978	785	396	392	790
作業	1玉当	18	20	19	15	15	23	23	13	11	9	8
空手要素	合計	840	857	1,071	583	629	648	379	570	298	307	592
作業	1玉当	11	13	15	9	10	15	9	9	8	7	6
荷重要素	合計	491	266	270	389	243	300	200	215	98	85	198
作業	1玉当	7	4	4	6	4	7	5	4	3	2	2
車の移動	合計		210 <sup>(1)</sup>			72 <sup>(2)</sup>		27 <sup>(3)</sup>				
	1回当		70			24		27				
並びかえ	合計						25	372				
取り扱い	合計	74	68	71	64	65	43	42	61	38	47	99
数(玉)	1分当	5.6	5.1	5.3	6.6	6.7	4.4	4.3	7.8	9.6	12.0	12.5

注：(1) 各数値は1うね分(65m)の収穫作業の測定値を示す。

(2) 軽車の移動は、(1)3回、(2)2回、(3)1回。

(3) 軽車3人組の中継者は、積込者に中継57玉、車に積み込み3玉、直接採果して積み込み8玉、積込者は、中継者から57玉、採果者から直接に14玉受け取る。

表5 すいか収穫作業の時間分析(2)

(時間単位：1/100分)

作業区分		改善法						慣行法		
		トッパカー(1)			トッパカー(2)			ネコ車運搬		
		合計	1往復当	すいか1玉当	合計	1往復当	すいか1玉当	合計	1往復当	すいか1玉当
全要素	作業	1,600	800	15	1,670	835	15	1,605	229	22
車をほ場へ	運ぶ	268	134	—	202	101	—	218	31	—
車に積み込む		598	299	6	762	381	7	529	76	7
車をトラックへ	運ぶ	258	129	—	272	136	—	145	21	—
トラックに積み替える		476	238	5	434	217	4	713	102	10
運搬車往復回数(回)		2	—	—	2	—	—	7	—	—
すいか取り	合計	105	53	—	110	55	—	72	10.3	—
扱い数(玉)	1分当	6.6	—	—	6.6	—	—	4.5	—	—
運搬車移動距離(m)		206	103	—	146	73	—	178	25	—

注：(1) トッパカーは、うね(60m)の向う端から2人2組で採取開始、往復2回で小型トラック1台分採取。

(2) ネコ車は1人作業でうね間の牛前端(トラック側)から積み込み開始。

の空手要素作業所要時間は、慣行法がやや減少しているのに対し改善法では若干の移動を伴うことがあるため増加している。このことは採果者が中継者を待つすいかを渡すこととなり、採果者の荷重要素作業の増加となっている。改善法2人組作業では荷台のすいかを並べかえているが(このため1玉当たりの所要時間が大きくなる)、3人組作業では積込者が空手要素作業時に随時行なっている。

慣行法採取作業の1玉当たり所要時間は0.08分、1分間当たりの採果数は12.5玉と最大の能率を示して

るが、ネコ車搬出作業を加味すると1玉当たり0.30分を要することになる。これに対し、改善法3人組では0.19分/玉、5.3玉/分となり、2人2組では両組を合わせると0.09分/玉、11玉/分の能率を示し、作業時間の面でも短縮をはかることができた。トッパカー作業の測定を行なったうねの収穫作業は2回目ですいかが多かったため、15玉/分の採果速度を示しているが、運搬と積み替えを含めた全作業当たりでは6.6玉となり、軽車3人組をやや上回る能率を示した。移動距離は両方の作業配置が異なるので実測値の比較ができないが、同一の作

表6 すいか収穫要素作業の労働強度

要素作業	RMR	作業時間		取り扱い数		1玉の平均重	移動距離	
		総計	荷重	1玉当り	総数			1分当り
採果	4.5	3.9分	23%	0.21分	18玉	4.7玉	7.6kg	13m
	5.5	4.0	33	0.14	29	7.3	9.3	23
軽トラックへ積み込む	1.9	3.9	29	0.17	23	5.9	7.4	30
積み替	2.1	4.0	39	0.15	26	6.5	8.9	32
トップカー運搬積み替え	2.3	3.9	-	0.13	30	10.0	6.6	15
積み替	2.8	2.7	-	0.09	30	15.0	6.6	15
受けてうね間に置く	2.7	4.0	23	0.13	31	7.9	7.3	18
積み替	3.6	4.0	21	0.15	26	6.5	8.9	24
ネコ車積・運搬・積み替え	5.0	5.3	-	0.20	27	5.1	6.7	73
積み替	4.9	4.9	-	0.19	25	5.1	9.4	76

業配置で100玉をトラックに積み込むとして、ネコ車運搬(10玉積載)は、トップカー(50玉積載、2往復)の5倍、軽トラック(100玉積載、片道)の20倍の往復を必要とし、移動距離もそれに伴って増加してくる。このように、収穫作業に運搬車を利用することにより作業時間と移動距離の削減をはかることができた。

(4) 収穫作業の労働強度

すいか収穫作業の労働強度は作業条件によって異なってくる。沼尻氏によれば(3)、すいか収穫作業のRMR(5.2玉/分)4.0、ネコ車運搬(3.0玉/分)4.2の値が示されている。本報では、採果作業と両法の要素作業のRMRを実測して労働強度を比較検討した。

呼吸分析はダグラスバッグ法により採気し、レスピライザー(フクダ医理化製)でガス分析してRMRを算出した(4)。各要素作業のRMRおよび作業条件を表6に示した。

採果作業は、平均重量7.6kgのすいかを1分間当たり4.7玉採果する作業条件でRMRは4.5、9.3kg/玉、7.3玉/分のきつい条件でRMR5.5を示した。受け取ってうね間に置く作業は7.3kg/玉、7.9玉/分の作業条件でRMRは2.7、8.9kg/玉、6.5玉/分の作業条件でRMR3.6となり、積置作業ではすいかの重量増が労働負担を大きくしている。ネコ車運搬作業は6.7kg/玉のすいか27玉を3往復し作業時間5.3分(5.1玉/分、空車運搬13%、積み込み38%、積載車運搬14%、積み替え35%の所要時間配分)で操作してRMR5.0を示し、9.4kg/玉のすいか25玉を3往復して作業時間4.9分(5.1玉1分、所要時間配分は、13%、37%、13%、37%)の作業条件(重量増、運搬玉数減)でRMR4.9とほぼ同一の値を示した。軽トラック積み込み作業は7.4kg/玉、5.9玉/分の作業条件でRMRは1.9、8.9kg/玉、6.5玉/分の作業条件(積置作業RMRと同一条件)でRMR2.1

表7 生活時間と疲労

	生活時間				疲労症状	体重減少者	農夫症	フリッカー値変動
	生理時分	内睡眠時分	労働時分	その他時分				
標本農家	11 17	7 20	10 42	2 01	126	25	126	-0.6
その他	10 43	6 46	11 45	1 32	119	54	124	-4.6

となり、屈伸動作を少なくすることによりRMR値で1.5の軽減がみられた。トップカー作業は積載トップカーを15m後進させてから2人組でトラックに積み替える作業の取り手について測定した。6.6kg/玉のすいか30玉を3.85分(移動0.90分、積み替え2.95分)、10玉/分の速度で積み替えるとRMR2.3を示し、同じすいかを15玉/分(作業時間は2.65分で移動0.75分、積み替え1.90分)の速い速度で積み替えるとRMRは2.8と0.5の増加がみられた。このように収穫作業の改善を労働強度の面からみると、慣行法の重い労作に属するネコ車運搬作業とやや重い労作に属する積置作業を普通ないしやや重い労作に属する軽トラック積み込み作業に改善したことになる。

5 収穫期の生活時間と疲労について

標本農家(軽トラック法)の作業4人とその他の農家の作業20人(男11人、女9人)の生活時間調査と疲労調査を50年8月5~7日の3日間実施した。その結果を表7に示した。

疲労状況は各調査項目ともに標本農家がやや良好な結果を示した。生活時間では、標本農家の睡眠時間とその他の社会的文化的時間が30分多く、労働時間は1時間短縮されている。ここで標本農家の50年度すいか作総労働時間をみると、作付面積167a、作業4人で3,074時間となり、10a当たり184時間である。これを、岩坪の慣行法栽培農家(190a、作業3人)の試算労働時間(5)5,320時間、10a当たり280時間と比較すれば、10a当たり96時間(34%)の短縮がはかられたことになる。また、標本農家の収量調査では、慣行法栽培10a当たり712玉に対し改善法栽培899玉となり、運搬道拡大による15%のつぶれ地があるにもかかわらずむしろ良好な結果がえられた。

6 まとめ

すいか作農家の収穫時における労働負担軽減をはかるため、収穫作業で最も労働負担の大きな運搬作業について検討し、さらに、運搬車導入による収穫作業の手順、作業時間、労働強度などの変化を実測した結果良好な成績がえられた。健康でゆとり(時間的、精神的、労力的)のあるすいか作りを営んでいくために、対象地区農

家は1戸当たりの作付上限を1.5~2 haにとどめ、地力保全をはかりながら経営規模や立地条件に適した省力収穫法(ネコ車, トップカー, 軽トラック乗り入れ)を積極的に取り入れていく必要がある。

調査にご協力いただいた鳥取県農業改良課船場専技, 倉吉農業改良普及所石田, 会見, 原田普及員, 岩坪地区農家の方々, 実測の労をともした矢沢, 河波, 中岡, 藤本, 久次米, 大石, 鈴木, 竹内, 田原, 篠田の各氏に謝意を表する。

(1) 鳥取県農林部農業改良課「農家生活改善技術実験研究

報告書」昭和50年度。

(2) 中国四国農政局生産流通部「稲作転換対策の実施に伴う農業動向調査報告書」昭和49年度。

(3) 沼尻幸吉『明日の農作業者の健康管理のために』農山漁家生活改善研究会, p.10, 1972。

(4) 沼尻幸吉『労働の強さと適正作業量』労働科学研究所出版部, pp.197~258, 1966。

(5) 鳥取県農林部「農業経営指導の手引き」pp.54~58, 1973。

(鳥取大学農学部, \*鳥取県農業改良課)

## 『農村生活研究』執筆規定

1. 本誌の内容は農村生活に関するものとし、原著(論文)、総説、資料、文献抄録等を収録する。
2. 原稿の取扱いは編集委員会に一任のこと。
3. 原稿は横書きとし、新かなかついによる平かな、当用漢字を用い、書体は楷書とする。
4. 学名、外国語(地名、人名など)はアルファベットにて綴り、特殊な和名、欧文の音訳などは片かなを用いる。
5. 句読点、カッコなどには一画を与え、明瞭に書くこと。
6. 原著(論文)は図、表、写真を含んで指定の原稿用紙(400字詰)30枚以内とし、刷上り6頁以内を限度とする。また図、表、写真は全部で4枚以内とする。
7. 原著の刷上りが6頁以上を超える場合、その超過分の実費は著者負担とする。
8. 資料は原稿用紙12枚以内とする。
9. 原稿は表題、所属、著者名、本文、引用文献の順に記載する。なお、英文の表題、所属、著者名を付記する。
10. 引用文献は著者名、雑誌(書名)、巻(号)、頁数、年号の順に記す。
11. 図は、白紙に黒インクでえがき、そのまま亜鉛凸版に製版できるようにすること。
12. 投稿希望者は予め、ハガキ又は口頭でその旨を編集委員会に申し込むことにし、原稿は受け付け順に掲載するものとする。
13. 原稿は下記に書留便をもって送付すること。

〒114 東京都北区西ヶ原 2-1-7 農業技術研究所 農村生活科内『農村生活研究』編集委員会